
紋章使い--スペルマスター--

ユージ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紋章使い - スペルマスター -

【Nコード】

N2293R

【作者名】

ユージ

【あらすじ】

この世界には紋章使い - スペルマスター - と呼ばれる人がいる。そんな世界の紋章使いだけが通える学園、シャルティナ学園に通うことになった主人公はその学園で人生の中でもっとも大切な経験を積んでゆく。

そんな主人公が最後に選んだ道は！？
基本主人公最強ものです。勢いで初投稿です生温かい目で読んでみてください。

第一話 prologue (前書き)

勢いませの初投稿です。

誤字・脱字・この文法と使い回しおかしね？のような指摘じゃんじ
ゃんお待ちしております。

第一話 prologue

・・・それはある雑居ビルの一室での会話――

そこにはやけに年期の入ったデスクに肘を乗せ椅子に座っている40歳半ばあたりの男と青年いや15歳あたりの少年がデスクの男と対面に立っていた。

「まあ、そういうわけでこれから遅れた青春ライフでも取り戻して楽しんできなさい。」

男はあえて気楽に言う。

「本当にいいんですか？というか俺が今更日常の学園生活を送るなんて・・・」

対して少年は覇気がなくどこことなく自嘲しているように呟いた。

「まあまあ、そんなネガティブになる事でもないさ。君だってたしか小学校は通っていただろ？」

「まあそうですね・・・、良くて低学年ぐらいまででしたよ?」

「十分じゃないか」

男は笑顔で言い放つ。

「まあ準備はこっちは任せて君は明後日から行く所ぐらい調べて見

たらどうだい。……ああ、あとこちらの事は気にないでいい、むしろ忘れてもらった方が自由だろう。」

どうやら少年の悩みなど気にもしないようだ。

「はあ、わかりました。あなたがそう言うのであれば行きますよ。ええっと行く所は確かシャルティナ東京学園でしたっけ？」

少年の問いに男は今までにない優しさの交じった顔で言う。

「ああ行つてこい玲弥」

「行つてきますよ父さん」

少年はやや疲れたように言い返す。

今この部屋には40半ばの男、間宮逸樹まみやいつきしか居ない先ほどの男の事を父さんと呼んだ少年、真藤玲弥しんどうれいはすでに出て行った後のようだ。一人になって若干の寂しさを漂わせる一室で逸樹は悲しみと期待を決めて一人呟く。

「できればそのまま今までの事を断ち切つてずっと日常の中へ行つて欲しいよ」

その目はずっと玲弥が出て行つた扉を見ていた。

第一話 prologue (後書き)

ええっとはい短すぎて、感想もへったくれないですよね・・・
というわけでとりあえずすぐに第一章をだして皆様のご意見を聞き
つつ執筆したと思います。

まあ多分第一章は世界観の説明ですべてが終わると思いますが・・・
。

第二話 引っ越し後の気苦労（前書き）

今回もじゃんじゃんご意見お待ちしております！どうかご意見をください！

誤字・脱字・文法の誤り・使い回しおかしくねなどの指摘よろしく
お願いします。

第二話 引越し後の気苦労

この世界には紋章使い（スペルマスター）という人達がいる。その数は世界人口の約四割つまり10人に4人はこの紋章使いだ。

この紋章使いという人達は必ず自身の体のどこかに紋章が刻んである。刻むと言ってもタトゥーのように彫るという感じではなく、写し出されているという表現の方が合っていると思う。

想像どおりこの紋章には科学では解明できない力が宿っている。各国の人々はこの力を章力と言いその力の各国の目的は違えど育成、強化に力を注いでいる。

その目的とは各国様々だ、ある国は戦争に用い、ある国は国内の治安の保守をさせる、またある国はその力の原因と解明に乗り出しその結果を他国へと売りさばいたりこの章力というものは持っているだけでその国のその人の絶対的な力となりえるものなのだ。

その章力を行使する方法を纏めてスペルと言い、大きく二種類に分けられる。一つはフォーススペル（身体的強化紋章）紋章にやどる章力を直接身体の一部または全身に循環させることで運動機能を大幅に強化させる事ができる。

またこの循環を応用し章力を循環させるさいに自身に触れている武器の部分をつどりその武器ごと章力を循環させる、これによって運動機能と同時に武器の性能も大幅に上げることができるようになるだ。

主に厚板が切れる程度の刀で金属板を真つ二つにできるぐらいだと考えたら簡単だと思う、これがフォーススペルの簡単な説明。

もう一つに、マジックスペル（魔術的論理紋章）これは自身の紋章を展開させそこから章力を直接放つ事を言う。このさいの紋章の展開はいわば章力を外に解き放つゲートの役目をしている。

だがこのまま章力を外に解き放つだけではあまり意味がない、あてたとしてもせいぜい章力による物理的反動を与えるぐらいだからだ。なので紋章使い達は展開する紋章に属性の陣を加えることよって放たれる章力を制御、変化させ属性を付与させているのだ。付与させた属性により放たれるマジックスペルの種類は変わるのだ。

属性とは基本的に、火、水、氷、土、雷、風、光、闇の8属性からなり人には得意な属性がる。その理由として自身の紋章によることが大きい、スペルの得意不得意の理由は様々だが最初から火属性の陣が自分の紋章に刻んであったり、火の陣の一部でも刻んであったりと紋章に関する理由が大多数を占めているからである。

ただ稀に8属性どれにも属さないマジックスペルを行使できる紋章使いがいることがある。その理由は一緒だ、自分の紋章に最初からその稀なる属性の陣が書かれてある事があるからだ。

これらがこの世界の紋章使い達の紋章とスペルに対しての一般的な知識である。

そんな紋章使いの一人である真藤玲弥が明日から通うことになったのがシャルティナ東京学園略してシャナ学園である。けして紅世の徒と戦ったりする人達をもじった訳ではない。

とにかく各国は紋章使いの育成と強化にもっとも力を注いでる。のために当たり前であるがやはりそれを効率良くするのに一番都合が良かったのが学園である。シャルティナ東京学園は其中でもトップクラスの紋章使い育成学園なのである。なのはいいのだけでも

・

「はあ、別に俺結局スペル使えないしそんなトップのところに
てもしょうがない気がするん
だけだなあ・・・」

玲弥は一人自分のために借りられたマンションの一室でため息を吐
いた。

別に逸樹に一切スペルを使うとかは言われてない、むしろ「使う
のはいいけどほどほどにね」とか言われていたりする。だが玲弥は
使う気もなければみんなの前でこれを晒すつもりもなかった。

玲弥はこれを使うたびに脳裏によぎるのだ、昔の記憶があのもっと
も忘れたくてもっとも吐き気がする記憶。

だから玲弥はそれを忘れようと必死だった、だが記憶からは簡単に
は逃れられない。力を使うたびに脳裏によぎる。そんな事を毎日し
ていたら忘れたくても忘れられないのだ。いくら今までそんな事を
繰り返してきたからと言ってこれから自由に楽しめと言われて送り
出された玲弥にとってそんな事を学園で思い出すのはどうしても耐
えられなかったのである。

「こんな事ならせめて通う学園のレベルぐらい下げて貰えばよかつ
た。」

そんな事で解決できる事でもないと思うが玲弥は思う、いくらスペ
ル無しでも、もっとレベル
が低かったらそんな目立たなかったのに・・・と。

「まあそんな事言ってもしょうがないよな・・・大体そろそろ部屋
で一人ずつと独り言を言うのに
疲れてきたし・・・（主に精神面で・・・）。」

そんな事にも疲れてきた玲弥は一人引越しの片付けを終わらした。
(と言ってもそこまで荷物があるわけじゃなくほっといてもいいくらいなのだが暇なのでやっていただけである)

早々と風呂に入り明日の準備を整える。そう明日は玲弥にとって発
登校の日なのだ!!

まあ入学式なのでほかのみんなも発登校なのだが玲弥にとっては小
学生低学年から中学時代をすっ飛ばした形で高校生なので人一倍心
配しているのである。

むしろ事と場合によつたら即イジメの対象だよぐらいのネガティ
ブ野郎だった・・・。

「さてとまあなるようになるだろう!もう寝ますか。」

玲弥は気持ちの切り替えを早々とすませ、明日の入学式に向かって
期待と不安を持ちながら瞼を閉じたのである。

第二話 引っ越し後の気苦労（後書き）

さて、はいそうですね・・・世界観だけでほとんど埋まっちゃってますよね・・・。

でも、しょうがないですよ！もう話のストックないし！とりあえず世界観で本文埋めちゃえみたいなノリでしたから。

とりあえずまた頑張って続き今から執筆していきますので生温かい目で見守ってやってください。

第三話 入学式での出会い（前書き）

はいというわけで第一話を出してから今までずっと執筆してやっと第二話が出せました。

話のストックがないのって死ぬほどつらいんですね・・・。

誤字・脱字・文法・文の使い回しおかしくない？などのご意見感想お待ちしております。

第三話 入学式での出会い

ピピピピッピピピッピーピー！！

寝る前に枕元に置いておいた目覚まし時計が俺を現実へと引き戻しにかかる。もちろん俺は力かぎり抵抗する。が、相手は目覚まし時計だけではなかった……朝の日差しが玲弥のうつろな瞳を直撃した。

「眩しっ！？」

俺は一気に現実へ引き戻された。まったくもって完敗だ……。

「今度からカーテンだけは閉めて寝よう、目覚まし時計だけならまだいいが朝日はまずい勝負にすらならないからな。」

フツと自嘲の笑みを浮かべる玲弥だがそんな事をしている間にも時間というものは無情にも過ぎてゆく事を玲弥は全く持つて気がつかなかった。

「さて今回の勝負の分析も済んだことだしもう一眠り………
つて今何時！？」

目覚まし時計はこんな所でも玲弥に追い打ちをかけたのだった。現在時刻8時50分、入学式開始時間9時ちょうどである。

「Oh! Sit!!」

玲弥のそれからの行動はもはや人の枠を超えていた。朝ご飯を食べ

ながら歯を磨き、顔を洗いながら服を着替える。とても常人には真似できないだろう・・・いろいろな意味で。

それらをわずから5分で終わらずと玲弥は学園まで全力で走った。例えるならば風になった言われる奴である。幸い逸樹が借りてくれたマンションは学園まで徒歩15の近場なのでここは感謝すべきところだろう。だが徒歩15分であるならば走って10分・・・玲弥の尋常じゃない頑張りが伝わるだろうか。

「はあ、はあ、はあ、はあ、もう死ぬ・・・」

玲弥は間に合った開始時刻1分と15秒前である。玲弥は今無駄に広いシャルティナ学園の講堂の一席に腰を下ろしていた。もちろん玲弥が最後であったのは言うまでもない。

「ねえ、君大丈夫？」

満身創痍の玲弥に隣の席から声が届いた。玲弥は最後の力を振り絞り声のした方を向いた。そこに居たのははっきり言って美少女だった。

整った顔立ちに若干幼さを残した表情栗色のショートヘアで百人に聞けば95人は美人だと言うだろう女の子が。さすがに玲弥も少しばかり驚いていた、がそんな事を気にする余裕なんて今の玲弥には残っていなかったようだ。

「ゼエーゼエーゼエー、だ、だいじょうぶ。」

そんな玲弥に対して女の方は若干顔を引きつらせながら声を掛けてきた。

「だ、大丈夫じゃないみたいですネ。」

「ご、ごめんちょっと休ませて・・・」

「ど、どうぞ」

しばらくたった後、入学式はいつのまにか校長先生の挨拶へと移っていた。

「えっとごめん心配かけて。」

「大丈夫ですよ。」

・ 若干苦笑を交えながらも言葉を返してくれた。だけではなかった・

「あのせつかくですから、これから新1年同士なんだし。お友達になろうよっ」

彼女はとてもフレンドリーな性格のようだ・・・正直玲弥なんかと友達になっていいのだろうか、本人が一番疑問に思うところであった。

「わ、わかったじゃあ改めて自己紹介するよ、俺は真藤玲弥よろしく。」

「私は宮間守^{えんどうまもり}よろしくねえ！」

強者でも一発ノックアウトの笑顔である。無論玲弥もノックアウト

寸前であつた。

「宮間さんその笑顔を振りまくのは控えめにしたほうがいい。なん
というか破壊力が抜群だから……。」

「ええ！破壊力！？」

どうやら宮間は自分で気がついてないようだ。素でびっくりしているよ……。

そんなやりとりの時にタイミング良く校長先生の長話も終わり次は、生徒会長の挨拶に移ろうとしていた。俺も宮間も黙まりこくつてしまった。それはもちろん今中央でマイクに手を伸ばしている女性のせいである。

出てきた生徒会長であろう女性はまさに完璧だった。

少し細めの小顔に腰まで伸びる黒色のストレートヘア宮間をかわい
い系言うならこの人は綺麗系だろう。そしてなによりすごいのがそ
こまでの人が生徒会長であると言うことだ。この学園で生徒会長は
イコール学園最強なのだから。

つまりこの学園で生徒会長になる方法は学力が一定水準以上であり
学園にいるどの生徒よりも強い事だ。学力のほうは多少の上下はあ
るが、学園最強それだけは絶対条件である。そんな席にこのような
容姿端麗の女性が座っているのだから俺たちが言葉失うのも無理は
ないだろう。

そして彼女の挨拶が始まった。

「初めまして新1年生のみなさん。私はこの学校の生徒会長を務め
ている二年の桐原きりはら素だ。今回の入学にあたりまだみんな緊張してい

と思うだから早くこの学校に慣れてほしい。明日にはみんなの章力検査とランク付けがされると思うがそこで緊張していたら後々後悔することになるからみんながんばってくれ言葉足りないがこの学園でみんなを一番応援しているのは生徒会でありこの私だと言っておく。ではみんながんばって3年間学園生活を送って欲しいではこれで生徒会長の挨拶を終わる。」

それはまるでこの講堂内を支配するかのごとく放たれ紡ぎ出された言葉だった。現に校長先生の挨拶の時でさえそこかしこからヒソヒソ話が絶えなかったのに桐原先輩がでてきた瞬間からいままで講堂内は静まりかえっていた。みんな話す事も忘れ桐原先輩の雰囲気飲まれていたのである。

俺はただ雰囲気ではなくただその綺麗な顔に魅入っていただけだったけど。

その後は閉会式が行われ入学式はそつなく終わったのだった。ほとんどの生徒は親と一緒に帰って行ったがもちろん俺は一人だ。寂しいなんて思いもしないただなにも感じないだけだった。

ただ帰り際に宮間に、

「明日クラス一緒だったらいいね！」

と言われた時には嬉しさが出てきたが、後から明日への不安の方が大きくなっていった。さっきまで宮間の近くにいたから分かったが、彼女はとても強いと思う。感じる章力が普通の人より人一倍強いのだ。

だけど俺は力が使えない事で落ちこぼれ街道まっしぐらである事間

違いなしである。

はあ・・・明日への漠然とした不安を抱えながら帰路につく玲弥だった。

第四話 ランクとクラス（前書き）

はいどうも第三話がやっと投稿できました。

執筆スピードがどうしても上がりません！一日に一回以上投稿されている作者様には平伏しますよ。いやほんとに・・・

では誤字・脱字・文法の誤り・使い回しおかしくね？などのご指摘
感想お願いします。

第四話 ランクとクラス

その日の朝、玲弥は怒っていた。何に怒っているかと言うと・・・

「よしわかったたしかに俺はお前が嫌いだ。お前も俺が嫌いだろう、だけど！だけどな！こんな仕打ちはありか！？」

そう今玲弥の目の前には朝にベルが鳴るはずだった目覚まし時計が置いてあった。皆様のご想像どおり鳴るはずだった物が鳴らなかったのである。

「完全に遅刻じゃないかあ！・・・・まさかクラス分け初日から遅刻するなんて。」

まあその原因を簡単に説明すると、昨日の夜にいつもなら仕掛ける目覚ましを忘れていたのである。ようするに自業自得だった。

「もういいや・・・どうせ遅刻なんだ急ぐ必要もないだろう。」

もう完全にすべてをあきらめた玲弥だった。

たしか今日の集合時間は昨日と同じ9時丁度だったはずだ。只今の時間9時15分である・・・もうそんな事も気になくなったのかひょうひょうとした態度で玲弥が今向かっているのは多目的ホールである。今日はまず最初に一人、一人の章力の測定とクラス分けするのに多目的ホールという無駄にただっぴろいだけのホールに集まる予定だったからだ。

ちなみにここで章力の測定とランク分けについて説明すると。章力の測定とは文字どおりその人の紋章に宿る章力を測定数値化することだ。出された数値を章力値いいこの章力値によってその人の単純な強さがわかると言っても過言ではない。

だが章力値が高いからと言って常に弱い章力値の人に勝てるとは限らない。戦闘時に展開するスペル属性の相性にもよるし戦術だって大きく勝因に関係してくる。

でもやはり章力値という奴は単純にその人の強さ計るし、数値が高いほど無駄に注目されやすいのもあるからだろう。

オオオオオオオ！！

そんな時やつと多目的ホールに到着した玲弥の耳に同じ生徒達のだよめきが聞こえてきた。

「・・・さんすごいですね。あなたの章力値は2500よ。」

名前の方はどよめきであまり聞こえなかったけど、どうやら誰かの数値が非常に高かったらしい。たしかに2500は一般の紋章使いに比べて非常にぬきんでている。あくまで一般のだけど・・・。

その一般の紋章使いの章力値はたしか1000ぐらいだったはずだ。優秀な人でも1500ぐらいだったはずである。

ちなみにここに通う生徒達はほとんどが1500あたりの人達である。・・・さすがトップクラスと言えるだろう。

そんな時不意に声を掛けられた。

「あつ真藤君！！」

どうやら声を掛けたのはさっきの章力値2500の人のようだ。
俺は一瞬焦った、まだ来て間もないし（というか入学式しか来ていない）知り合いもいないと思ってたからである。だが声の方を向いてみると・・・

「真藤君こんにちわ！また会いましたね。」

「宮間さんだったのか。」

そこには何を隠そう昨日の入学式で知り合った間宮守がいた。
というか周りの人達みんなこっち注目してるんですけど・・・・・・
なにこの羞恥プレイ？

「よかったあ、私今真藤君しか知り合いいないし心細かったんだよ。
（若干上目遣い）」

若干顔を赤らめながらのセリフに玲弥はもうそのまま勢いで押し倒す寸前だった。

玲弥じゃなかったらすでに押し倒していたと思う。

「はい宮間さん次はランク分けだから奥の方の列に並んでね。」

そんな玲弥の心の葛藤なんてつゆ知らず章力を計っていた先生は宮間に声を掛けた。

「あ、はいわかりました。じゃあまたあとで真藤君。」

「ああ、じゃあまた」

若干置いてきぼり喰らった玲弥だが周りの目が宮間を追っている隙に生徒達の列へと紛れ込んだのだった。

ここでさっきの説明の続きだが、章力値の測定が終わったら次はランク分けである。

ランク分けとはいわば総合評価のようなものだ。その道の資格をもった審査員が直接その紋章使用を評価するのだ。その審査には章力値を始めに、フォーススペルとマジックスペルの実際の発動、発動スピードや威力など全属性を調べるのだ。もちろん紋章についてやスペルについての筆記試験も行われその総合評価をランクD～Aで表すのがランク分けである。

玲弥にとってこれほど逃げたくなる状況はそうはない。どうやっても玲弥のランクわかりきっているからだ。

結局玲弥はマジックスペルが使えないのである。章力値は通常のまま見せる事もできるのだがさすがにマジックスペルも使えない奴が章力値だけ馬鹿高かったら不審がられるので、玲弥は章力値にも自分で制限を掛けていた。これで多分さっき助けてくれた先生の目にも1500あたりに見えるだろうと思う。

が、そこに重大な問題があった、今の玲弥はマジックスペルは使えない・・・とりえとして章力値とフォーススペルがあるが、章力値の制限によって章力は軽く見られ制限によって十二分にフォーススペル発揮できないつまり・・・。

「はあ、あなたDランクね。」

Oh!Sit!!!!!!

何も事情を知らない審査員の方は無情にも玲弥をそう判定したのだ。
った。

まずこの学園内にランクDの紋章使いがいること自体珍しいのだ。
その理由はこのランク分けは何もこの学園内だけの制度ではないからだ世界で取り決められた紋章使い達の制度だからだ。

知っての通りこの学園はトップクラスの実力者達に通うレベルである。本来ならDランク判定の物は入学することもできないはずである。だからあんなに審査員の人達が睨んできたのだ・・・。

ウウ・・・今思い出しても泣けてくる、あの審査員の方々の「え、嘘でしょ？冗談は顔だけにしてよ」という白い目を・・・ウウ

ついなのでここでぶつちやけておくと真藤玲弥の容姿だが、意外にも整っている若干のつり目に真っ直ぐ鼻筋が通り、小さな唇つまり少なからずイケメンの部類に入ったり入らなかったりする顔立ちなのだ。数値で表すと二・六枚目ぐらいだ。

そんな玲弥が意気消沈しながらクラス分けの紙が貼られている所へ行き自分のクラスをたしかめる・・・あつたどうやらクラスは1年Cクラスのようなのだ。

その時に若干のざわめきにが聞こえ、横を見ると必死にクラス分けを見つめている宮間の姿があつた。

「あ、宮間さんクラスどこだった？」

「へっ？あ、し、真藤君つえ、ええつとCクラスですCクラス！」

なぜかこっちに気がついた宮間さんは若干慌てた様子だったのはな

んでだろうか、そんなことをされるとこっちまで焦ってくるからやめてほしい。

「と、ところで真藤君はクラスどこ？」

やっと落ち着きを取り戻した宮間はこちらに聞いてきた。

「えっと、俺も一応Cクラスだけど・・・」

「ほんとに！？よかったー！じゃあこれから3年間よろしく願います。」

玲弥のランクも知らずに本当に嬉しそうにはしゃいでいる宮間を見て玲弥も同じ気持ちになった。

それは今まで過去と現在に縛られ続けた玲弥にとって初めて未来に楽しみを感じた瞬間だった。

あれからクラスへ着いたみんなはそれぞれの席へ着き担任の到着をまつた。もちろん玲弥もしっかり遅れず着いてきている。

待つこと数分突然ドアがガラツと音を立てて開きみんながそちらへと注目する。そして入ってきたのは・・・

ツルツコテツ「きゃっ！」

・・・なんと天然そうな先生だった。

第四話 ランクとクラス（後書き）

さて、ここまで来てまだスペルのスの字も出てきませんね……。
なんと言いますか自分でも先が思いやられます！

というわけで今回少し宮間さんをデレさせました。むしろどこらへんからデレたの！？と疑問にお持ちの方はその方のご想像にお任せします。

→けしてさじを投げたわけじゃありません。

第五話 騒動の後はまた騒動（前書き）

やっと1回綺麗さっぱり消え去った第五話を再度書き終わらしました！

読んでくださっていた皆様遅くなつてすみませんでした。

多少文のなかの登場人物のキャラがバラバラになったりしている可能性があります。すみません多少ヤケクソで執筆していましたので・
・
・

誤字・脱字・文法の誤り・この使い回しおかしいなどのご意見感想よろしく願います。

第五話 騒動の後はまた騒動

「み、みなさん初めまして！私が今回Cクラスの担任になった神崎しんざきゆかり25歳独身です！これから三年間皆さんと楽しいときも辛いときも一緒にがんばりましょう！！」

えいえいおーと勢いよくてを振り上げるゆかり先生の姿は、まるで子供のような雰囲気だった。

と、そこへ自分の自己紹介が済んだのか、ゆかり先生からの提案が上げられた。

「で、ではこれから恒例の自己紹介を開催したいと思います！」

そうゆかり先生はクラスのみんなに言ったのである。若干照れながら……。

「では最初の君からお願いね」

「は、はいえと相原海人あいはらかいとです！章力値は1600です。よろしくお願ひします！」

「はい次の人」

そうやって次の紹介を促す姿も子供っぽかった。別に身長が低いとかではなく、なんとなくその挙動と雰囲気がそれだったのだ。

そこへ突然前の席の男子がこちらを振り向いてきて喋り掛けてきた。

「なあ、あの先生なんだか子供みたいな雰囲気だな。」

どうやら思っていたのは玲弥だけではなかったようだ。少し安心した玲弥だった。

「たしかにだよな。なんというかオーラがもうそうだ。」

「だよなあー」

と、そこへ突如前方からその言葉はふりかかってきた。

「その二人いゝ？ 一体何を喋っているのかなあ？」

その声を聞いた瞬間、二人同時に冷や汗をながした。そして前を向くとそこにはものすごい笑顔のゆかり先生が俺達の前に仁王立ちしていた。

「か、感は鋭そうだな。」

「・・・・・・」

「うん、どうした？」

「いや、たしかに鋭そうだ。」

「まあーえつと真藤君に城崎君だね、二人とも放課後に職員室までくるようにい！」

そう言ってまた自己紹介へと戻って行ったゆかり先生を見て、また大変なクラスになったなと玲弥小さなため息を吐いた。
と、そこでまた前の席の席の男子が振り向いてきた。その目を見ている

と少し申し訳なさそうにしていた。

「なんか悪かったな、一緒に怒られて俺は城崎賢助しろさきけんすけって言うんだよろしく！」

「いや、俺も一緒の事を考えてたから大丈夫、俺は真藤玲弥よろしく。」

俺もそつと苦笑交じりに返事を返した。そうして俺達は友達になった。

その後は自己紹介も滞りなく進んでいったが、そんな中でやはり注目を浴びたのが宮間さんだった。まず席を立った時点で、少なくともこのクラスの男子生徒の目線は根こそぎ奪い取っていっただろう。そしてとどめといわんばかりにあの章力値である。

でもいろんな意味でこの時間に一番注目を浴たのは賢助だったと思う。いやそうだと断言できる。

その時ついに賢助の番が来た。

「はい次の人〜」

「はい！俺の名前は城崎賢助、章力値は1800です。みんなこれからよろしく！」

そこまではよかった。

「はい、賢助君ね〜」

「あのかおり先生！」

「なあに？」

「俺と・・・つき合ってください！！！！！！！！！」

友よまだ会って間もないけどあえて言わせてもらっ・・・お前の頭は大丈夫か？
ゆかり先生固まってるよ？

「・・・・・・・・」

「どうでしょうか！！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・「・・・・・・・・はい、次の人」

流した！！！！？？

「先生！？」

その時、前にいる友人の顔をのぞき込んだら・・・泣きそうだった。

その後、話を聞いてみたら子供云々の話を止められた時に向けられたあの笑顔に一目惚れしてしまったらしい。あの時すこし返答がおかしかったのもその所為かと一人納得していた玲弥だった。

その後は学校での諸注意と明日の授業に關しての説明で終わったので、比較的早めに放課後となった。

ここで一つ説明しておく、この学園の敷地面積はとてつもなく広い。その広大な敷地の中には木々が密集して作られた森があるほどだ。簡単にいうと普通の森が一つまるまる学園の中に入っているのである。さすがに自然にできたものよりは一回り小さいが、十分な大きさと言えるだろう。

もちろんそんな森を入れる余裕があるのだから校舎のほうはでかいし広い。本館校舎に第二本館校舎、実習棟に演習場が完全に完備されている。さらに演習場に至っては一番大きなものでサッカーコート並の広さにドームが形成されいつでもスperlでの授業や勝負ができる。それに大小の演習場が合計五つある。最初は玲弥も多すぎるだろうと思っていたが、この学園の生徒は全員紋章使いだし、国からその育成を進められているのでその機能は十分に働いてると言えるだろう。

もちろんこのような完璧な設備の完備は演習場だけではない。ほぼすべての場所でこのような高い水準の機能が備わっているのだ。

なぜいきなりこんな説明をしたかという・・・

放課後の呼び出しのため職員室に向かっていた玲弥はこの広い校舎の中を一人迷っていた・・・。
なぜに一人なのかと言うと、先にトイレに行こうと思った玲弥は賢助に先に行くように促し結果的に一人で職員室まで行くことになったからである。

「ああまさか迷子になるとは・・・はあ、こうなるんだったら賢助に待ってもらったらよかったよ。」

と、そんな愚痴をこぼしながら一人廊下を歩く玲弥だが、もうすでに放課後の呼び出しには間に合わないと割り切ると、「もういいや明日謝ったらいいかな」と逆に開き直り、まあ賢助のためにもなっただろうと今日知り合った友人の事を考えて校舎の中を探索がてら迷ってる玲弥だった。

そんな玲弥の耳に突然生徒同士の言い争う会話が聞こえそちらの方へ向いてみると、そこは小さなホールとなっておりその周りに小さな人垣ができていた。

玲弥は好奇心に押されその人垣の中へ入っていったのである。その事を後々後悔することに玲弥はなるのだった。

「ふざけんなよ！！誰が俺の事を傲慢で弱いだつて言うんだよ！！！」

「だから！そうやっていかにも全部自分の思い通りになるっていう所が傲慢で弱いつて言ってるのよ！」

どうやら周りのヒソヒソ声を聞いてみると男子生徒の方が女子生徒に告白しそれがフラれて男子生徒の方が逆ギレしたらしい。

まだ入学式が一日しかたつてなく今日クラス発表のはずだけど、いきなり告白するとは驚きだった。

そんな女子生徒の方を見ると、たしかにすごく美人だった。平均よりやや高いぐらいの身長に腰まで伸びたストレートの黒髪に、その容姿は小顔で少しつり上がった目元に高めの鼻、小さめの口である。全体的に少しきつめの印象をうけるがそれもまた彼女の雰囲気と合っていた。

その容姿にはたしかにこの人なら知り合ったその日に一目惚れして

勢いで告白することにも頷けた。

その時、女子生徒はもうこれで話しは終わりとはかりに未だに声を荒げている男子生徒に言い放った。

「わかった！？じゃあもう私につきまとわないでね！！」

強く言い放ち女子生徒は男子生徒に背中を向けて歩き出した。

「このアマあ！今更後悔すんなよお！！」

それに逆上したのか、怒鳴って男子生徒は右手を前に突き出した。

その行動に「あぶない！！！」と全員が感じた。案の定その予想は最悪の形で実現した。

突如男の手の前に紋章が浮かび上がる。そして男が章力を籠めた、それに答えるかのように空中に浮かび上がる紋章は輝きを放った。そして男子生徒は言い放つ！

「ファイヤーアロー
＜火急なる火矢＞！！」

火属性のそのスペルは下位スペルだが、その展開時間の早さと発動時間の早さは下位スペルでもトップクラスであった。

その声に気付いたのか女子生徒は、振り向いたがいきなりのスペル発動に驚きをあらわにしていた。結果それが避けるための致命的なタイムロスなる。

誰もがその瞬間に当たる！と思った時、スぺルと女子生徒の間に転がり込む一つの影があった。

シューーバアアン！！！

「きゃああー！！」

シューー火属性特有の煙がたつ。

「・・・痛たたつ」

その煙の中、その影は緊張感の声と同時に立ち上がった。その影とはもちろん玲弥だった。

「あぶないあぶない、えとお君大丈夫？」

そう言つて悲鳴を上げまだ目を瞑っていた女子生徒へ玲弥は問いかけた。

「え？あつだ、大丈夫・・・えとあなたは大丈夫？」

「ああ、俺は大丈夫、ぎりぎり章壁が間にあつたから。」

玲弥は先の男子生徒の行動からいつ助けに入るか迷っていた。玲弥は今スぺルを使えない状況だから自分が助けに入るか躊躇していたのである。そこへ不意に人垣がどよめきその勢いに押されて偶然そこへ転がり込んだのだ。

玲弥はそんな自分の油断に齒がみしながら男子生徒に向かって言った。

「とりあえず君も落ち着こう。さすがにこれ以上は・・・」

「うるせえ！！なんだお前は！？邪魔しやがって、邪魔するんだったらお前事焼いてやるよ！！」

男子生徒はまったくもって先の行為に対して後悔する気配すらないようだ。

そんな男子生徒がまた、さっきのように手を前に突き出そうとした時、その声は凜としこの小さなホールに響いた。

「そこまでだ！！一体君たちは何をやっている！？」

周りにいた小さな人垣は、その声を出した人を見た瞬間驚きの表情を浮かべ、順に道を空けていった。

そこにいたのは、この学園最強であり生徒会会長を務めている桐原棗だった。桐原会長はこちらに向かって堂々と近付いて来た。

「せ、生徒会長・・・」

さっきまであんなに暴れていた男子生徒が生徒会長を見た瞬間から完全に萎縮してしまっていた。

男子生徒へ近づいて行った桐原会長は、突然男子生徒の腕を掴み捻り挙げ、実にスムーズに間接を決めていった。

「君にはすまないが事情を聞きたいので無理矢理にでも少しついて来てもらう。」

その容赦のなさにはさすがに女子生徒も驚いていた。

「あと君にも章壁で身を守っていたらどうから身体が大丈夫だったら一緒について来てくれ、あと君は明日また改めて話をしよう。今日は帰って休むんだ。」

前者は玲弥に、後者は未だ玲弥の後ろにいる女子生徒に桐原会長は言った。

先に女子生徒が返事をした。

「は、はい。」

ここで、章壁について説明するとまず章力を体内を循環させて身体強化を行うのをフォーススぺルの中で、浸透と言われるスぺルである。身体に章力を浸透させ使うのでそう呼ばれている。

だがこの浸透は普通マジックスぺル同士での戦いになるとほとんどの紋章使い達は浸透を使わない、なぜならいくら浸透で運動機能を強化してもマジックスぺルでの攻撃をくらったら直接その身体にダメージがいくからである。あくまで浸透は運動機能などの強化であって外部からのダメージは防げないのである。武器への浸透はまた別であるが。

だからその場合、章力を身体に浸透させるではなく章力を身体の表面で循環させるのである。それによってマジックスぺルでの属性攻撃を物理的衝撃へと変換させたりできるのだそれを章壁と言われるフォーススぺルである。

さらに章壁はその密度を上げると完全にその攻撃を無力化させることもできるし、逆に密度が薄かったりもっと中位、上位のマジックスぺルを受けると直接その被害を身体にうける事もある。

さっき攻撃を向けられた女子生徒も、突然のスぺルに対して驚くこ

とがなかったら章壁を展開し身を守れていたと思う。

そんな章壁で身も守っていたので、玲弥の身体も直後若干頭に衝撃がきたぐらいで大丈夫だったのですばやく返事をした。

「わかりました。」

「ではついて来るんだ。」

そうやってさつき歩いてきた道をまた戻っていこうとする桐原会長について行こうとした玲弥に後ろから声を掛けられた。
掛けたのはさつきまで騒動の被害者である女子生徒だった。

「あの！」

「な、なに？」

「さつきはありがとう・・・あなたの名前を教えて！」

「ああそれなら気にしなくても大丈夫、俺の名前は真藤玲弥だ、ああえっと君の・・・」

「おい君、何をしている早くついて来るんだ。」

とそこまで言ったところへまた桐原会長から声が掛かり無理矢理に会話が中断した。

「あ、じゃあまた。」

「あ、あの！」

そう言つて玲弥はその場を後にしたのだった。玲弥の姿が見えなくなるまでその背中に向けられた視線に気付かないまま。

「真藤君か・・・」

女子生徒の呟きは誰にも聞こえる事が無いままこの小さなホールへと吸い込まれていった。

第五話 騒動の後はまた騒動（後書き）

はいやっと出せた第五話です。ここに来てやっとスペルが出てきました。

え？これだけ！？と思った方もいると思います。すみませんとしか言いようがありません・・・。

また近々大々的にスペルを使い合う計画もありますので楽しみにしててください。

また今回は違和感この上ない説明文の挿入に場の緊張感が萎えたという方にもすみませんでした！はんば執筆がヤケだったので許してください！

この次は自然に文の中に入れられるように頑張りたいと思います。

お気に入り登録してくださった方ありがとうございます！入ってくださいの方々を見ていたら執筆スピードも鰻登りです！

評価をくださった方もありがとうございます！初めての評価で興奮が抑えられません！けして変な意味ではありません！

そして初めての感想をしてくださった方ありがとうございます！やっぱ指摘してくださって初めて気付く事もあり大変勉強になりました！

ではまた第六話で！

第六話 生徒会室での会話（前書き）

では第六話目どうぞ生温かい目で見てください。

誤字・脱字・文法の誤り・文の使い回しがおかしいなどの「意見」感想よろしく願います。

第六話 生徒会室での会話

玲弥は今、事の発端である男子生徒と一緒に生徒会長桐原棗に連れられ廊下を進んでいた。もちろん男子生徒の方は間接を捻り挙げられ拘束済みである。

「さてここだ。」

そういつて桐原会長はやけに大きな両開きの扉の前で止まった。ドア上のプレートを見て見るとそこには”生徒会室”と書いてあった。そこで桐原会長は俺達を招き入れるように、その扉を両手で押し開け二人を中に入るように促した。

中に入るとまずこの両手開きの入り口と反対側に新たな扉が三つ目に付いた。さらに部屋の中央には高価そうな長いテーブルが置いてあり、左右に椅子が並び計10ほどが座れるように成っていた。

玲弥はこの学校の生徒会室としては質素だなと少し疑問に思いながらそれを口にとすることなく席に着かされたのだった。

「まず始めに君たちの名前を聞いておこうか。」

そう言つて桐原会長はかすかな笑みをつくつて聞いた。

「か、かどかわしょう角川翔だ……です。」

「俺は真藤玲弥です。」

「では、今回の事について詳しく教えて貰おうか？」

そう言つて桐原会長は目を細めた。それに視線に答えるように角川は今回の騒動について説明した。

その雰囲気を見て玲弥はあのホールでの凶暴な性格をあらわにした角川がすんなりと真相について話して敬語まで使っている姿に内心驚いていた。どうやら完全に目の前の生徒会長のプレッシャーに萎縮しているか、また例の一目惚れでもしたのだろう。そのそのあたりに見当をつけてみる。

と、一通りの説明が終わつたのか桐原会長が口を開いた。

「大体の趣旨はわかつた。が、君は今回非常に危険な行為をした事を自覚しなさい。今回はその真藤君が助けに入つてその女生徒にケガが無かつたからいいが、一つ間違えれば惨事になっていた所だ。その事をよく考えるんだ。」

さすがに生徒会長でありこの学園最強だ、その身からのプレッシャーが半端じゃない。

「は、はひっ」

完全に角川君怯えてますよ・・・。

「よくわかつたならいい、わかつてるな今度今回のような事を起こしたら学校側へは報告せざるおえないからな。女生徒へは私から言つておく。」

「わ、わかりました。どうもありがとうございました・・・。」

「よし、じゃあもう今日は帰りにいい。」

そう言つて桐原会長は角川に帰るよう促した。それ反応して角川はゆっくりとこの部屋を出て行つた。最後まで肩が若干震えていたのを見るとどうやらさうとう会長からのプレッシャーが堪えていたようだ。

とこの部屋に二人つきりとなつて初めて桐原会長が玲弥に声を掛けてきた。

「と、今回の事の顛末を聞いた限りでは君はほとんど今回の件について無関係のようだ、ここまで無理矢理連れてきてしまつてすまない。」

とすまなそうに頭を下げてきた桐原会長の突然の謝罪には玲弥も声をだして驚いた。

「そ、そんな俺はまったく大丈夫なので気にしないでくださいよ。」

「そ、そうか君がそういうのなら許してもらおう。ところで本当に身体のほうは大丈夫か？」

「あ、そつちの事なら全然大丈夫です。一応章壁で防ぎましたから」

「そうか、ならいいんだ。」

桐原会長は潔く引き下がってくれたようだ。そのまま玲弥はここを後にする・・・

「ところで真藤君は章力を操るのにたけているのだな、唐突の一瞬で章壁をはり自身を守るなんて普通じゃあそんな一瞬で章壁ははれないぞ。」

とはやはり行かなかった。この人は感も鋭いらしい、へたにこの人の前で動かないほうが良いだろうと玲弥は頭の中にメモをした。

「い、いやそんな偶然ですよ。」

「そ、そうなのか。あの失礼だがマジックスペルはどのあたりまで使えるんだ？」

今一番聞いて欲しくなかった事を聞かれて玲弥は頭を抱えそうになる。

「そ、それはあれですよ学園最強である生徒会長のあなたに教えるほどたいそんなものでもない
んでいいですついたらって普通ですからっ。」

「そ、そうかならいいんだ、いきなり挙動不審になるから驚いたぞ？。」

若干意味不明さがいなめないがなんとか答えずにすんだようだ。それに変な所抜けてるみたいだった。

「で、では俺用も終わりのようなのでもう帰りますね。」

そんな玲弥の言葉に対して、意味深な笑みを浮かべた桐原会長が答える。

「ふふつやつぱり君は不思議な人だな。」

「へっ？」思わずまぬけな声を出してしまった玲弥、帰ろうと思つて声をかけたになぜか不思議な人だと言われてしまったのだ・・・

しかも微笑み付きで。

「いや君のようなねあっけらかんとした態度をした生徒は久しぶりだったんだよ。」

あっけらかんとは、どこかに俺は会長に対して失礼な態度を取ってしまったのだろうか？俺はこれでも最低限の礼儀は重んじているつもりだけど・・・？

「いや、失礼な態度とかそういう事ではなくてな。」

玲弥の様子にその理由を察したのか先に答えを出してくれた。

「普通というか大半の生徒は私を一对一で前にすると萎縮したり何らかのプレッシャーを感じていたのだがね、君の場合はそんな様子を一つも見せる気配もださず普通に会話できていたからね。」

それはそれでもうしょうがないと思う。だってこんな美人で威厳を構えてる人と一对一でだなんて普通は緊張するだろう。

だが玲弥場合そんなもの玲弥のこれまでの人生を見てみたら、些細な事にすぎなかった。

「君とは良い友達になれそうだ。ふふっ」

そういつて彼女はこれまでと違った暖かな微笑みを玲弥にむけた。と、あまりの展開に言葉を失っていた玲弥に何か勘違いしたのだろうか、少し焦ったように桐原会長は言った。

「あ、すつすまないこれは一方的だったな。どうだろう私と友達になつてくれないか真藤君？」

「あ、大丈夫です。若干展開に追いつけて内だけですから。でもそういう事ならお安いご用です。これからよろしくお願いします桐原先輩。」

桐原先輩はほつとしたような顔を浮かべた。

「よ、よろしくだな。」

若干はにかむ言った桐原先輩は一瞬見とれてしまうほど可愛いと思ってしまった玲弥だったが、そんな桐原先輩この空気を変えるために無理矢理笑いを作り喋り掛けてきた。
そんな桐原先輩に心の中で答えるような笑みを向けたのは内緒だ。

「ふふっ君は私を会長とは言わず先輩と呼んでくれるのだな。」

「それはまあ、会長は役職であつた桐原先輩ではないのでそっちのほうがいいのかなと、あ、あの会長の方がよかつたら会長でも。」

「いや、むしろそっちの方がうれしいよ、最近みんなが会長、会長言うものだからみんな私名前を知っているのかと時々不安になるときもあるよ。」

「ははは、それはちゃんと大丈夫だと思いますよ、ちゃんと桐原先輩の事は覚えていていますよ。」

「今日あつたばかりの君に言われるとなぜだか照れるな、それなら別に名前の方で呼んで貰ってもいいんだぞ?」

「そつそれは、俺の方が照れるのでやめておきます。」

というか絶対周りが黙っていないだろう。昨日入学式で、今日初めてのクラス分けなのに誰もがうらやむ生徒会長の事を名前呼びするなんて……恐ろしくてできる勇気がない。

「じゃあそろそろ俺は帰ります。」

「そうか、ならまたいつかお話でもしよう友達だからな。」

そう言つてあの暖かな微笑みを向けてくる先輩に玲弥も自然に笑みがこぼれた。

そんな事はこれまでの玲弥の人生の中でも珍しかった。

「あ、そうだ桐原先輩」

「なんだ？」

そういえば一つ重大な事を忘れていた。玲弥は真剣な眼差しを桐原先輩に向けた言い放った。

「帰りまで俺とつき合ってくださいっ。」

「はへ？……」

一瞬の間を後に

「い、いやいやいや！そ、それはだな！え、えっとお順序というも

のを踏んでだな！い、いや友達にはなってるし……いやいやいや！そういう訳じゃなくてだなもつとこうお互い分かり合ってから……」

さつきまでの会長の威厳など微塵も感じさせないほどの気の抜けた返事を返した先輩は、いきなり顔を真っ赤にして慌てだした。

「あ、あの先輩？何を思ってるか想像はしませんが、まだ校舎の中がわからないから送って行って欲しいって意味だったんですけど……？」

「……いや、別に嫌というわけじゃなくてだな？とういうかまずそんなこといきなり言われても私は困っ……へ？」

「い、いやだからあの送っていただけるとうれしいかなと……？」

「……き、き、君はバカかああああ……！！！」

今度こそ先輩は顔を煙りをふきそうな勢いで真っ赤にして玲弥は怒鳴られた。

「ではここまでいいな？」

そう言った先輩はまだ熱があるのか若干頬を赤く染めていた。

「はいどうもありがとうございます桐原先輩」

「じゃあまた今度会おう玲弥君」

そう言つて玲弥とは逆にもう一度校舎の方へ先輩は歩いて言った。
どうやらまだ生徒会の雑務などがあるらしい。

そういえばあの生徒会室、ほかの生徒会の人達はいなかったみたい
だけどなぜだろう？

まあそんな事は今考えてもしようがないと思い、今日はいろいろあ
つて疲れた（主に精神面で）玲弥は足早と自宅のマンションへと向
かうのだった。

マンションの一室そこで疲れた身体をこの部屋に唯一一つあるソフ
アーに投げ出し、今日あったことを一つ一つ思い出しながら玲弥は
休んでいた。

そんな時、その携帯は鳴った。

ピピピピピピピピピピッ 無機質な電子音、それが指すのは玲弥
がつい一昨日までいた組織からの連絡だった。

この音を聞いた瞬間、玲弥は思考を切り替え驚くほど素早く携帯を
手に取りでる。

「やあ真藤君四日ぶりぐらいだけど元気かな？」

そこにでたのは、ついこの前にあの雑居ビルと一緒にいた男の声だ

った。

「逸樹さんから直接連絡ですか、只の世間話じゃあないですね一体どうしたんですか？」

「君は話しが早いね。そつちはまだ入学式を済ませたばかりではないけどね・・・例の組織が動き出したようだ。」

一瞬、その言葉に玲弥の目が鋭く殺気を含ましたが文字どおりそれは一瞬だった。

「例の組織というと・・・ケルベロス<Cerberus>」

「そうだ。まだ君の入学のことはばれてはいないが、まあまずばれることは無いと思うが、相手はあの組織だ、君に伝えておいても良いだろうと思ってね。」

「そうですか、わかりました。では一応こちらでも警戒はしておきますね。」

「いやいや、君はそんなに気を張らなくていい。この事はこちらに任せて君はこれからの学校生活を満喫しなさい。」

逸樹の声は一転してとしても愛嬌のある声へと変わった。このお調子者の流れになると玲弥もいつのまにかその空気に流されてしまうのである。

「そついう訳にも・・・。」

「だから気にしないでいい、いつそ此方なんか忘れてしまってくれ。」

それよりも今日たしか初めて仲間との顔合わせだったはずだね？どうだね友達はもうできたのかい？」

「はぁ、一応できましたよ？」

「そうかできたか！それはよかった。そうだ玲弥……その友達は女の子なのかい？」

「ま、まあ女の子もいますけど……。」

なぜかここで玲弥は嫌な予感を覚えた。

「そうか！そうか！女の子の友達か、さすが玲弥だなもうそんなに手玉にとるとは……。」

どうやら予感は早場と当たってしまったようだ。

「あなたは一体何を考えているんですか！？大体もうつてそんな何人もみたいに」

「はっはっは慌てている所がまた怪しいなあ？」

そう言った逸樹が電話の向こう側で怪しく笑っている姿が容易に想像できる玲弥だった。

「大体、玲弥の事だその女の子の友達というのは一人だけじゃないだろう？」

「い、いやまあたしかに……そうですね。そんな手玉なんてっ」

「まあまあ、私なんて玲弥ぐらいの頃なんてな………」

そんな久しぶりの”親子”の会話はそれからもしばらくマンション一室から途切れることは無かった。

ここは玲弥のマンションとは違う、ある雑居ビルの一室である。

そこで今さっきまで久しぶり息子との会話を終えて、例の組織について男が一人年期の入ったデスクに肘をつけて報告を受けていた。

「以上ですね。」

「そうか、ではもういいありがとう。」

「はいでは。」

そう言つて返事をしたのは、上は黒色を地としたパーカーを着て下は同じく黒色のジーンズをはいた人だった。

その人はパツと見の印象を言うともるで影だった。その影のような人は自分の仕事が終わったのか、まっすぐと部屋に一つしかない出口に向かって歩き出て行った。

またこの部屋に一人となった男、逸樹は報告をつけ強く胸に誓っていた。

このまま玲弥をまたこちらに連れてくる事は簡単だ。だがそれでい

いのか逸樹の組織はこれまで玲弥に頼ってきたぶんはある。

それはけして組織内の紋章使い達が弱いだとかそういう事ではない。むしろそれにせまる実力者が多数いることが事実だ。だが彼に頼ってきたのはそう言う戦力としての部分だけでは無い。

むしろ気持ち、感情の部分で彼の存在は大きかった。この組織内で彼と仲がよくなかった人物のほうが珍しいと思う。玲弥にはなにか惹きつける何かがあると思う。そしてそれは普通こんな裏の組織内で発揮されるような才能ではないはずだと逸樹は思う。それはむしろ今の玲弥のように普通の人生の中で活かされるべき才能だ・・・。

それに逸樹の中にあるいくばかの数少ない親心というものが玲弥をまたこちらに呼びたくなかったのである。

逸樹はそんな心の葛藤を胸の内にしまい改めて強く胸に誓ったのである。

真藤玲弥という一人の人間を幸せにしてみせると。

第六話 生徒会室での会話（後書き）

はいえっと今回はほとんど、というかすべて会話で終わってしまいました。

次回からは少し話しの希望も貰ったので、もう少し面白おかしく盛り上げていこうと思っています。

ので少し頭の中で想像もとい妄想していたストーリー（話しのストックなんてありませんb）を若干変えつつ照らし合わせつつ書いていこうと思いますので、少し時間がかかる可能性があります。

その時は、ああこの作者まだ面白くも無い文をスツカラカンの頭使って考えてるよと思って貰って待ってあげてください。

ただし現状まったくもってリアルな文中のねたなど考えてもないので、まったくもって面白おかしくもくそも無い文ができあがるかもしれないのでその時は、どうかご了承してやってください。

では第七話をお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2293r/>

紋章使い--スペルマスター--

2011年3月17日17時00分発行